



# 悲劇を繰り返さないため、 自分にできることを 私の防災士としての活動

## 未曾有の大災害

2011年3月11日、東日本大震災。千葉県浦安市の自宅にいた私は大きく長い揺れに驚いたが、これが自分の人生を変えるものだとは思いつかなかった。家の外に出ると至る所から灰色の汚泥が噴出し、硫黄のような生臭い匂いが立ち込め、下水管がやられたのだと思った。液化化現象である。幸い自宅は目立った傾きはなく、多少タイルが割れたり、内壁のゆがみはあったが近隣宅から比べれば被害は無いに等しい。しかし、この時から8日間水が出ない生活が続く、計画停電もあり、5kg痩せた。

東北地方では、津波による犠牲者の数がテレビで確認するたびに増えていき大変なことになっていたが、自分が置かれている状況は、手も洗えない、トイレも流せない、

洗濯や風呂はもちろん、歯も磨けず、その対応に四苦八苦していた。当時は「自分が被災者だ」という認識はなかったが、私にとってこの時の経験はその後の防災活動に役立つことになる。

震災直後から何より欲しかったのは情報だった。幸い電気は通っていたことからテレビやインターネットは問題なく使えていたが、東北地方の被害状況、福島第一原発の状況がほとんどで、浦安の情報は無いに等しい。

そこで自転車で地区を回り、いろいろな人に声をかけ、断片的な情報をまとめて、防災翌日にメールアドレスを把握していた自治会員宛てにメール配信した。給水場の情報、計画停電の日時、水道復旧の見込み情報などである。これら情報はその日の内にも地区内188世帯のほとんどにスマートフォンや印刷物、口コミで回り、多くの方々に喜ばれ感謝された。

## 防災士になる

その後情報メール配信を継続することになるが、振り返ってみると、このメール配信は自分自身の防災活動への一つのきっかけになったと思う。自分にも何か役に立つことができるのではないかと、地域に貢献できないのではないかと、漠然とそうした気持ちが湧いていた。

震災の年の秋頃には地元も落ち着いてきて東北に目を向けた時、宮城県石巻市立大川小学校の記事が目にとまった。河口から約5kmの距離にある学校を津波が襲い、校庭から避難しようとしていた児童78名中74名と教職員11名中10名が死亡、学校の管理下にある子どもが犠牲になった事件・事故としては戦後最悪の惨事である。



青木 信夫

「防災コミュニティネットワーク」代表

【あおき・のぶお】

2011年の東日本大震災を浦安で被災したことをきっかけに防災に傾倒。防災士資格を取得後自ら地震体験車を購入し、各地で講演活動や防災支援活動を行っている。平成28年度防災士機構防災士功労賞を受賞。



何度も訪れている石巻市立大川小学校

なぜ逃げなかったのか、なぜ逃げられなかったのか、なぜ裏山に行かなかったのか、いろいろ疑問が湧いたが、それを判断する知識が自分にはない。現場に行きたいという気持ちを抑え、まずは最低限の知識を得てからその答えを探しに行こうと思った。

インターネットで防災に関する資格を調べ、まず「防災危機管理者」を取り、次に「防災士」を取得した。それらの講習は自分にとって大変勉強になった。その後「防災介助士」「応急手当普及員」「千葉県災害対策コーディネーター」「上級セーフティリーダー」「地域防災インストラクター」など取得したが、ジャンルは多少異なるものの内容的な差は大きくは感じられない。

防災士は「自助、共助、協働」を原則として、社会の様々な場で防災力を高める活動が期待され、そのための十分な意識と一定の知識・技能を修得したことを日本防災士機構が認証した人」という民間資格である。防災士には、自治会防災会や自主防災組織のリーダーとしてその活躍が期待される。2018年12月時点で防災士の認証登録数は約16万人、その中でも地域防災力の向上を目指し安全で安心な社会の実現のために活動することを目的とする「日本防災士会」の会員数は同時点で約8600人である。私もその一員になった。

防災士の中には消防、警察、自衛隊のOBの方々もたくさんいる。人を助けることを生業としてきた方々だ。当然技術も高く、なにより実践的である。肩書も立派であり、それだけで説得力がある。

しかし、私はそれまで仕事で防災に関わった経験が全くなかった。大学卒業後土木設計事務所に就職したが、小さな事務所だったこともあり、社長の急死で会社が解散してしまった。当時31歳、元々独立願望があったが勇気がなく悶々としていた私は、これを機に独立した。形ばかりの会社を設立し、お世話になっていた取引先から仕事をいただき1人で細々と業務を続けていたが、副業として当時は先駆的だった電子書籍のネット販売を始めた。数年間は予想通り副業の域を出なかったが、インターネットが普及し始めると業績は急激に伸び、副業が

あつという間に本業に代わった。

山あり谷ありの連続だったが、仕事は面白かった。格好良く言えばIT社長だが、華やかさとは無縁で地道に愚直に働いた。人も増え業績も順調に伸びていた頃、M&Aの話が飛び込み、大手企業の傘下に入ることになった。契約上の代表期間を経て、若い世代にバトンタッチすべきと引退した。燃え尽き感があつた。

振り返ってみると仕事へ打ち込んでいるときも災害は発生していたが、1995年の阪神・淡路大震災は対岸の火事であり、2004年の新潟県中越地震も単なるニュースの一つでしかなかった。2005年の福知山線脱線事故の時は税務調査が入っていたため対応に追われほとんど記憶がない。仕事上防災とは接点がなかった。

### 東北へ

防災士の資格を取得した後、私は東北に向かった。行先は石巻市立大川小学校である。どうしてこの惨事が起こってしまったのか、答えを見つけないと思った。車で数時間かけて宮城県石巻市に入り、新北上大橋が見えてくると胸が高まった。写真で何回も見た光景だ。

大川小学校は低い位置にあるため、遠くから見ることはできない。震災時に学校が避難先とした「三角地帯」と呼ばれる場所に着くと小学校がそこにあつた。しかし、



講演の様子

学校以外に何もない。大川地区は住宅、学校、郵便局など、一集落を形成していたが、瓦礫の山と学校以外本当に何もなかった。

学校をぐるりと回り、裏山に上り、川の堤防、三角地帯、そして子ども達が待機していた校庭で考えた。なぜこれほど多くの犠牲者が出てしまったのか——。しかし、全く答えが出ない。私はたじろいだ。確かに裏山に登れば助かったかもしれない、もっと早く行動していれば被害は少なかったかもしれない。『たられば』が頭をよぎるが、自分がその時その場所にいたら子ども達を速やかに避難させることができただろうか。大川小学校は津波の浸水想定区域に入っており、近隣

住民の「ここまで津波が来たことはない」という言葉に押しされ、家族が子ども達の引き取りに来て対応している中、自分はその場にいる人達を説得して、率先して避難を促し全員を助けることができただろうか——。自分には無理だと思った。不甲斐なさと防災の深さを思い知った。

亡くなった子ども達・教職員の無念は察するに余りある。答えを見つけないことはできなかつたが、「この死を決して無駄にしてはいけない。多くの人たちを助ける礎にしなければいけない」と思った。その思いを胸に、防災士服をまとい、学校に手を合わせた。その後東北に十数回行くことになるが、大川小学校へはその都度足を運んでいる。

### 防災支援活動への参加

知識・技術がない私は、まず関連書籍を読み漁り、過去の災害、関連法規、最新の防災、自主防災士組織、応急救護などを勉強しつつ、日本防災士会や他の防災関連団体に入会し、積極的に防災支援活動に参加した。

支援活動と言っても、基本は防災訓練のお手伝いであるが、実務・実技に関しては声を出して身体を動かさないと始まらないし、経験を積まないと支援する側に回れない。在住の千葉県内で行われる訓練活動をメインに、積極的に参加した。

現在においても防災支援活動が私の主となる活動であるが、講演や講習はもとより、

災害時で効果的なロープの結び方や救命講習、新聞スリッパの作成や園児向けの身の守り方まで様々な活動を行っている。その基となる理念は、「防災を普及させることで救われる命があり、悲しむ人が少なくなる。そのために、自分でできることを実践する」ことである。

大川小学校で手を合わせた決意は、7年経った今も全く変わっていない。命を救うために河川改修を行ったり、法整備を進めたりといったことは自分にはできないが、行政の手の届かないごく一般の方々、自治会、自主防災会などへの細やかな防滅災の勧めは、自分あるいは自分達でなければできないことだと考えている。

基本的にボランティアの活動になるが、私は「ボランティアは奉仕活動ではあるものの、自分の為に行うものだ」と考えている。人に伝えたい、人の為になることをしたい、ああしたい、こうしたい、という欲求は自分が欲したものであり、人に言われて仕方なくやるものではないからだ。その欲求を満たす現場が、たまたま結果として奉仕活動であったり、人の為になったり、喜ばれることだったりする。

したがって、自分が行う活動は、してあげるのではなく、『させていただく』のであり、これは伝える立場であっても教える立場であっても同じく『させていただく』という気持ちである。講座や訓練の要請を受ける時においても、私でよろしければ一

生懸命やらせていただき、お伝えすることができれば、大変ありがたく感謝したいと思っています。

### なぜ地震体験車を買ったのか

私が防災支援活動を行っている中で、自治会の方からの嘆きの声がよく聞かれた。「年1回の防災訓練でも参加率が悪く、訓練もマンネリ化し、年々衰退しているが何か良い手立てはないか」というものだった。もちろん積極的に防災に取り組み、成果を上げ、減災に結びつけているところはたく



購入した地震体験車

さんあるが、多くの自治会、自主防災組織では訓練そのものに頭を悩ませている状況であった。私も外部の人間が訓練支援に参加させていただけでも、それによって参加率が大幅に高まることはほとんどなかった。

そのような状況下、防災関連の知人から「地震体験車を呼んだら、防災訓練の参加者が倍になった」という話を聞いた。確かに地震体験車は分かりやすい訓練であり、訴求効果は大きい。老若男女誰でも体験できるし、震度7の揺れを体験すれば、家の耐震化や家具固定を勧めるきっかけにもなるだろう。地震対策で最初にやるべきことは家の耐震化と家具固定であることから、これほどマッチしたツールは他にないと思った。

一般に地震体験車は県や市で保有している、私の住む千葉県でも自主防災訓練などで借りるには、半年前に申し込みをして抽選で当たれば、地震体験車を使った訓練が実施できるが、需要が多く時期も偏っていることから、ほとんどが抽選漏れになってしまう。

もし自分が地震体験車を購入し、普段体験できない多くの小さな自治会にも積極的に出向くことができれば、こんな素晴らしいことはない。防災に無頓着な人であっても地震体験をしてみたいという人は大勢いるし、むしろそうした方々に地震の恐さ、対策の必要性、具体的な対策方法を知ってもらいたい。それによって、1人でも多くの方々の命が救われるのであれば、防災普及を目指す者にとって、これ以上のことは

ない。地震体験車をきっかけとして、様々な防災訓練メニューを提供でき、一緒に訓練計画を立てたり、防災講話を行ったり、その地域にマッチした防災活動を行うことができるだろうと考えた。

しかし、そもそも個人で購入できるものなのか、免許はいるのか、費用はどのくらいか、特殊なメンテナンスはいるのか、疑問だらけだった。インターネットで調べても情報は限られている。

「当たって砕ける」の精神で地震体験車の製造メーカーに連絡を取ったが、案の定門前払いだった。「何をおっしゃっているのでしょうか」の状態である。自治体が入札を行って購入する特殊車両なので、一般販売は当然行っていないし、メンテナンスも必要だし、維持費もかかる。したがって、企業で保有することはあっても、個人で持つ人など日本にはいないし、メーカーからすれば「そんなものを持ったところで、どうするのですか？」といった具合である。

それでも私は気を取り直して、購入の目的や計画、防災活動を行っていることや思いを伝えたところ、1社が大変丁寧に話を聞いてくださり、大阪まで打合せに行き、商談成立となった。それから約1年後となる2015年2月、晴れて納車となった。

### 今後の防災活動

地震体験車を導入したことに伴って、私

の防災活動はそれまで以上に活発化した。私は防災士仲間とチームを組み「防災コミュニティネットワーク」のホームページを立ち上げ、地震体験車を使った防災訓練の予約カレンダーを表示した。この活動は口コミだけでも広がっていき、最近では日程が重なり、お断りせざるを得ないことも多くなってきた。せっかくお声がけいいただいたのに大変申し訳ない気持ちであるが、こればかりは致し方ないところである。しかし、うれしい誤算もある。「自ら地震体験車を持って活動している」ということが「積極的に活発な活動イメージ」を持



防災コミュニティネットワークと日本防災士会のメンバーと（写真後列右端が筆者）

たれ、地震体験を伴わない講演や図上訓練の活動も比例して増えていることである。約半数はそうした活動である。

地震体験は比較的那場限りという欠点があるが、講演、講座は自分の意見や経験を伝えることができる。東日本大震災の被災経験や現場に赴いた経験も最大限利用し、命の大切さ、家族を亡くした方の言葉、避難所での出来事から水を流さないトイレ法まで、テーマに沿って訴え、問いかけ、伝えることができる。さらに防災士がチームになり活動を行うことで、日程が重なっても分散化することができるため、より多くの方々に防滅災の普及ができることは、大変ありがたい。

「防災コミュニティネットワーク」と「日本防災士会」の活動を合わせて、2018年に約130件の講座や訓練を行ったが、増加傾向にあることはうれしい限りである。特に小さな自治会や自主防災組織に伺うことができるのは、大変楽しみである。

大きな自治会、大きなマンションでは、比較的防災への取り組みが進んでいることが多い。大きければ予算もある。それに対して小さな地縁団体は予算もなく、組織的な動きも鈍く、何をしたらよいか分からず、遅々として防災への取り組みは進んでいない。しかし、そこに私たちが赴き講座や講習を行わせていただくと、とても反応が良く、吸収も早い。和気あいあいとしたコミュニティが醸成されているからだと思う

が、それが防災という視点でさらにコミュニティが発展すれば大きな防災力になる。

### 見つけた答え

東北視察の折、前述した大川小学校で大川地区の復興を担当する方のお話を聞く機会があった。何度も現地を訪れても見つけられなかった答えを、その方は端的に示してくれた。それは「油断」だった。

抽象的な言葉であり、具体的でもないし、誰でも言うことができるような言葉であるが、意味合いが多少異なる。津波が襲ってくるまでの間、現場では「正常化の偏見（危険が迫ってくるまで、その危険を認めよう」としない人間の心理傾向）や「失見当（時間や方向感覚が失われ、今どういう状況にあるのか分からなくなってしまうような障害）」がある中で、子ども達をどう守るか、最善は何か、それを模索する時そこに「油断」があり、震災前の訓練においてもいろいろなことを想定していなかった「油断」があった。それらを抱合する言葉である。この言葉の重みは命の重みであり、防災上の究極の言葉にも思えた。

大災害は残念ながら文明がある以上これからも続くが、まず自分が油断することなく、大川小学校の子ども達・教職員の無念を心に刻みつつ、彼らの死を無駄にしないよう、今後も積極的に各地に出向き、地域の防災力の向上に努めていきたいと思っている。